

第54回
平成30年度

「わたしの教育記録」特選受賞作品

応募総数87編の中から栄えある「特選」に選ばれた、
小野新町小学校・山内裕美教諭の作品全文を掲載いたします。

視覚的教材を活用した計画的・ 効果的な生徒指導を目指して

～「生徒指導」を可視化する取り組みを通して～

福島県小野町立小野新町小学校教諭 山内 裕美

1 はじめに

日々子どもたちが学級で生活していると、友人間のトラブルが起きたり、自分本位な行動によって周囲に迷惑がかかったりする場面が見られる。トラブル内容の大きさを問わずに見ると、生徒指導は毎日行われている。しかし、毎日の授業のように、前日に計画を立てて翌日の生徒指導に常に臨めるわけではない。毎日の指導だからこそ、「生徒指導」について研究をし、子どもたちのよりよい成長の支えになりたいと思いを実践を始めた。

2 「生徒指導」に対する イメージ変革の必要性

(1) 「生徒指導」＝「悪いことをしたから叱られる」という終結になっていないか

「生徒指導」と聞くと、「悪いことをしたから叱られる」というイメージが子どもたちの中には強い。何か改めるべき行動をした結果行われるもので、「悪い行動→トラブル→生徒指導」という、結末に待ち受けているものというイメージがあり、自分自身そのような指導に終始していたように思う。しかし、このイメージのままでは生徒指導は効果的に働かないと感じるよ

うになった。なぜ生徒指導が行われるのかと言えば、この先児童たちがよりよい人生を送る行動ができるようになってほしいからである。しかし、現状の自分の生徒指導では、多くの児童にとつて「生徒指導」は叱られた嫌な出来事であった。終わっていることが多いのではないだろうかと感じた。そのため、「生徒指導」＝「悪いことをしたから叱られる」という終末的なイメージを一新させる指導を考えていく必要があると考えた。「生徒指導」を以下の二点に重点を置いたものになるようにしていきたい。

(2) 「生徒指導」＝「スキルが高まる・どうすれば良かったのか分かる」というスタート地点へ

「生徒指導」を悪い行動の結末にするのではなく、「スキルが高まる・どうすれば良かったのか分かる」という、よりよい生活にするためのスタート地点に位置づけたい。児童は悪意をもってトラブルを引き起こしているわけではないことが多い。「楽しそうだ」とか「みんなやっているから自分も」とか、「どうすればいいか分からずイライラして」という気持ちのコントロールの難しさからトラブルに発展していることが多い。そこで「生徒指導」を活用する。「こんな行動をすれば解決できる」「こんな技で切り抜けることができる」ということを子どもに教える機会にしてはどうかと考えた。生徒指導

を「これからの生活に生きるスタート地点」として位置づけたい。

(3) 「生徒指導」Ⅱ児童との信頼関係の高まりの機会へ

また、「生徒指導」を児童との信頼関係をより高める機会として位置づけたい。生徒指導を行った結果、児童との関係が悪化したりぎこちなくなってしまうたりした経験がある。関係が構築できずに行う生徒指導では、指導の効果は低かったように思う。そこで、(2)で記述したように「スキルが高まる・どうすれば良かったのか分かる」ことに重点を置いて指導していけば、生徒指導は児童にとって「嫌な時間」ではなく「困り感が減少する先生との学習の時間」となるのではないだろうか。生徒指導を、児童との信頼関係を構築する絶好の機会となるようにしていきたい。

3 生徒指導のイメージ変革を 目指して

自分自身の生徒指導のイメージ変革を目指して、「計画的・視覚的で分かりやすい生徒指導」をすることにした。今までの私の指導の反省点としては、「指導の目標があいまいで、この指導の後に児童に何を理解してほしいか不明確だった。(児童の行動についての注意だけにとど

まっていた)」ことと、「事後的な指導であり、口頭での注意が多く児童にとって理解しにくい時間だった。」ことの二点が挙げられる。この二点を解決するために、①生徒指導の流れを整理整頓して可視化する、②視覚教材を作成して分かりやすい生徒指導を行う、ということを実践した。以下実践の記録である。

4 「生徒指導の流れ」の可視化

生徒指導を行う際に、気をつけることや指導の順序を整理整頓しまとめることにした。生徒指導が必要になる場面は突然現れることが多いが、生徒指導の流れが可視化できれば教師自身落ち着いて冷静に効果的な指導ができるのではないかと感じた。そこで、生徒指導を行う際の流れをまとめて整理し、指導に生かすことにした。詳細は別資料参照(※資料1)。

5 人間関係に関する生徒指導 の実践

今まで担任してきた学級での実践を中心に書いていきたい。
本学級は、明るく思いやりのある子どもたちであふれている。しかし、まだ成長の途中の時期であり、思春期でもあるので、相手への思い

の伝え方や自分の気持ちとの折り合いのつけ方で時々つまづいてしまうこともある。「ついカッとなってしまって。」とか「まさかこんなことになるなんて。」というケースも多い。良好な人間関係は学校の内外を問わず、楽しい生活を送るための基盤であると考えている。今回は生徒指導を通して、人間関係を今まで以上に良好にすること、子どもたちが将来人生を楽しく歩む力の向上を目的に実践していきたい。

6 視覚ツールの考案と活用

本学級のよさとしては、事前にルールを明確に決めておくとしつかりと守ろうとする素直さや、絵や文字にして話すことで状況を正確に理解する様子が見られることである。また、視覚ツールはどの児童にも分かりやすいので、個別の生徒指導だけではなくクラス全体での指導に生かすことができる。そのため、以下のような視覚ツールを考案した。

(1) ルールのカード化(ルールの全体共有のために)

基本的なルールやマナーは次のようなカードにして全体で共有しておく。これは、クラス全体で共有することに重要な意味がある。誰か個人だけのためのルールではなく、「クラスみんな

ながら大切にしているルールである」と共有することで、互いに生活しやすくなり、どの児童にとっても不公平感を感じないものになる。また、ルールのカードには、2通りのコースを描き、どの行動をとるとどのようになる結果が待っているのかが明記した。そのため、自分のこの行動の後に何が起こるのか等、先を見通すことが苦手な児童にとっても、どの行動をすればよいのか分かります。このカードの良いところは、何度か見せると、カードがなくても同じイメージを共有できる点である。

カードが手元になくても、「こういうときはどちらのコースを選ぶといいかな?」と問えば

●行動選択カード

Aコース(みんなニコニココース)

① まわりの友達も自分を大切にして、楽しく遊んで毎日気持ちよくさせる。

② 相方はきづかずし、まわりの友達には「この人はやさしい人」と見てくれる。

③ 苦手な気持ちはあるが、あいつつれり声をかけられたら返事をし、苦手な気持ちと伝えない。

この人苦手な人だよなあ、ちよといやだよなあ...

Bコース(ひとりしんぼりコース)

① まわりの友達も自分を大切にして、楽しく遊んで毎日気持ちよくさせる。

② 相方はきづかずし、まわりの友達には「この人は人にいやなことをする人」と見られる。

③ 苦手な気持ちがあいつつれり声をかけられたら返事をし、苦手な気持ちと相手に分かるように伝える。

START 現在 『苦手な友達がいる』

©HURONO YOSHINO

とんは相手でも(好きでも苦手でも)たいでても)

人として守るべきマナー

- ① あいさつする
- ② 声をかけられたら返事したり答えたりする

わがわがしいいいる気持はあつたが、わがわがしたつ無視したつすることはいいはなし

という自信を持たせることを心がけた。

(2) スケーリング定規(気持ちの整理のために)

このスケーリング定規は、気持ちを落ち着かせたり整理したりするために用いる。例えば、友達とけんかをした後に「イライラと悲しい気持ちは何のくらいずつあった?」と尋ねて定規を渡す。子どもは少し考えながら定規を動かす。下記のようにになると「ああ、私はイライラしていたけど、分かってもらえなくて悲しい気持ちもあつたのだ。友達に自分ってほしかったのか。」と自分の気持ちに気付くことができる。また、どのくらいイライラして



●スケーリング定規

「Aコースでした。Bになりそうでした。」と子どもたちはすぐ思いつく。さらに、生徒指導の際は、事前のルール周知を最も大切にすることにした。「トラブルが起きるから叱る」のではなく、「トラブルになる前に教えて、回避させる」ことで、失敗経験を減らし成功経験を増やして人とかわる楽しさを感じさせ、自分ならできる

この「ふり返りコミック」は教員2年目から実践してきたものである。事実や気持ちを整理したり、行動を考え直したりすることを目的に使用する。生徒指導の際にもふり返りコミックの実践を活用した。(右記のコミックは本学級

●ふり返りコミック

3/13(金) 5校時間45分

① B君に、A君が怒っていた。A君は「お前が怒った」と言っていた。A君は「お前が怒った」と言っていた。A君は「お前が怒った」と言っていた。

② B君は「お前が怒った」と言っていた。A君は「お前が怒った」と言っていた。A君は「お前が怒った」と言っていた。

③ A君は「お前が怒った」と言っていた。B君は「お前が怒った」と言っていた。A君は「お前が怒った」と言っていた。

④ B君は「お前が怒った」と言っていた。A君は「お前が怒った」と言っていた。A君は「お前が怒った」と言っていた。

⑤ その様子を見ていたC君は「お前が怒った」と言っていた。A君は「お前が怒った」と言っていた。A君は「お前が怒った」と言っていた。

⑥ やめて」とは言わなかったが、やめてほしいと思った。イライラは音楽室へ。

⑦ イライラして音楽室の下置き場で突然大声を出した。(この音がみんなに聞こえた。)

⑧ 「お前が怒った」と言っていた。A君は「お前が怒った」と言っていた。A君は「お前が怒った」と言っていた。

⑨ 「先生に相談する」

音程からC君とは4年間の関係は切れていない。笑顔をこぼして話した。今日は1日に2回くらいは「お前が怒った」と思っている。お前が怒った。お前が怒った。お前が怒った。

今日は、お前が怒った。お前が怒った。お前が怒った。

怒りたてはアツアツで怒りたて

いるのかなどを定規を使って操作して考えることで、冷静になり落ち着くこともできる。これはいろいろな心の葛藤場面でも使用することができる。これが分かる。

(3) 繰り返りコミック(状況を理解するために)

とは別のケースの指導で作成したもの)

実際にトラブルが起きてしまったとき、右記のようなふり返りコミックを作成する。児童の話聞きながら、時系列など整理し、何がトラブルの原因なのか、いっどうすればよかったのかなどをまとめていく。コミックを描いて話している、子ども自身が「⑦の自分の行動やめればよかったなあ」とか「⑥の時に先生に相談しておけばよかったなあ」など自分の行動を振り返るようになった。

また、コミックにしておくことで、予想していなかった成果が出た。一つ目は、管理職や学年主任・生徒指導主事への報告で事実の共有がしやすくなった点である。さらに二つ目は、本学級の生徒指導では行わなかったが、必要があれば管理職の指導を受けた上でふり返りコミックを保護者に渡すことで保護者との共通理解が図れたことである。この実践をするまでは電話だけで口頭で伝えるので、上手に伝えることが難しく、保護者とトラブルの内容理解がすれ違ってしまいうこともあった。ふり返りコミックを用いてからは保護者の方からも「何が起きたのかよく分かりました。家でも一緒に振り返ろうと思います。」と言われ、保護者の方にとっても事実を把握しやすく子どもと話しやすくなったことが分かった。また、このふり返りコミック

クによる指導を継続していた結果、子ども自身がふり返りコミックを描いて相談に来ることもあった。子どもたちにとっても状況整理に役立つようである。

(4) 行動決定カード(これからの行動を決めるために)

どの児童にも使用する下記のような行動決定カードを作成した。実際には一枚一枚切り離して使っている。例えば、「友達を強く責めて泣かせてしまった」というトラブルが起きたとする。子どもに「責めるカード」を見せて、この青いカードを選ぶとトラブルになることを伝える。その上で赤いカードを見せて、「この中の行動ならできそう? この中から選んでごらん。」と伝えて、児童に良い行動の選択肢の中からカードを選ばせる。このように、該当児童がとりやすい行動をカードにしておき、代替行動カードも用意しておくことで、今後どのような行動をとればよいか分かりやすくなる。詳しい活用方法は別資料参照(※資料2)。この指導を継続していった結果、友人関係で悩む児童の持ち札は、初めは青いカードばかりが目立っていたが、一年後には赤いカードが多くなった。児童本人からは「先生、もうこの青カードは使わなくなったから持ち札からなくします。赤いカードがいっぱい増えてきて友達とも仲良

くなりましたよ。」と、自分の成長を実感している様子の話を聞くことができた。

●今回やってしまった行動カード(青)〈一部〉



●今度同じ状況になったら、ぜひ選びたいカード(赤)〈一部〉



7 成果と課題

(1) 成果

○児童自身が感じる「教室の居心地」が良くなった。「友達がいっぱいできた。」と話し、笑

顔で過ごす児童がとて多くなった。
 ○児童一人ひとりが落ち着き、コミュニケーション力が向上したことでクラス全体も安心して生活できるようになった。
 ○クラスで困っている児童がいたときに、別の児童が「先生に相談した方がいいよ。先生ならどうすればいいか教えてくれるから。」とアドバイスしている姿が見られ、「生徒指導」を前向きに捉えていることが分かった。
 ○生徒指導と一緒に話す機会があることに信頼関係が強まり、児童が自分自身で考えてトラブルを回避しようとしたり、自分から正直にトラブルの報告に来て「どうすればよかったのでしょうか。」と相談に来たりするようになった。
 ○クラスの児童から相談に来てくれることが増え、小さなトラブルのうちに解決できることが多くなった。また、「怒られたらどうしようか」と思っているまでは言わなかったけど、先生に相談してよかった。」と言っている児童が増えた。

●資料1 生徒指導の流れ

生徒指導

～方針と流れ～
 2019.10 小野瀬小学校 教頭 内藤 泰

0. 指導の土台づくり (最重要)

① ルールの設定と共通理解
 ルールは、全員が周知することが大切。児童一人ひとりの理解を促す。ルールはシリアスに徹底させる。(ルール作りには別紙参照)
 また、ルールは、簡単に身につけられるように、簡単な言葉で表現することが大事。

② 具体的なゴールと提示
 「あいつ、学校で悪さをした。先生が怒った。お前も悪さをしたら先生が怒る。お前も悪さをしたら先生が怒る。お前も悪さをしたら先生が怒る。」
 具体的には「お前も悪さをしたら先生が怒る。お前も悪さをしたら先生が怒る。お前も悪さをしたら先生が怒る。」

③ 日々の生活関係づくり
 日々の生活関係づくり。先生が厳しく行動を促す。先生が厳しく行動を促す。先生が厳しく行動を促す。

生徒指導の流れ

1. トラブルの発生
 トラブルの発生。トラブルの発生。トラブルの発生。

1 目標を定める

2 よい指導法を考へ、選択する。

3 傾聴・スケーリング・整理 (子どもと向き合う)

4 指導

5 代替行動提示と切り替え補助

6 称賛・強化

3. 傾聴・スケーリング・整理 (子どもと向き合う)

① 傾聴 (本人の思いを聴く)

② スケーリング (指導の焦点を絞る)

③ 思考と事実の整理 (担任・児童)

4. 指導

① 受容 (感情に寄り添う)

② 修正 (行動・言葉・指導)

③ 提案 (代替行動提示)

④ 勇気づけ

コラム 生徒指導 基本の3本柱

見守り

修正

達成させる

5. 代替行動提示と切り替え補助

6. 称賛・強化 (その後の行動を見守り・定着させる)

① 称賛 (一緒に喜ぶ!!)

② 強化 (意味づけと価値づけ)

子どもたちにとって、学校生活で起きることの全てが学びのきっかけになる。しかし、教師が学びのきっかけに気づき効果的に指導をしなれば、学びにつながっていかないことも多くある。今回、生徒指導に焦点を当てて研究と実践を行った。子どもたちから「先生は、何が良くなって、その時どうすればいいのか教えてくれるから分かりやすかった。」という声がかかることが多くなった。生徒指導のイメージが、嫌な時間ではなく、「どうすればいいのか分かる・信頼関係を深める時間」に変化しつつあると感じる。今後も実践を継続していきたい。

《参考文献》

『コミュニケーション 自閉症など発達障害のある子どもたちのためのコミュニケーション支援法』キャロル・グレイ著／門眞一郎訳／明石書店

8 終わりに

子どもにより様々な行動・表現が見られるので、子ども一人ひとりに合わせたカードを作る時間が必要である。
 ■子どもの特性に応じてカードを使うときの声のかげ方や生徒指導のタイミングが違うので、児童理解を進めながらその都度調節が必要である。

●資料2 行動決定カード活用法

行動決定カードの活用について

＜教員のみでの活用編＞

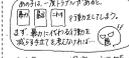
(1) 児童理解のツールとして

① 児童のよさの可視化



対象となる児童のよさ(物事の強み・武器)を可視化できる。児童のよさが多かったり、極端に少ないと分かったり、カードが少ないと分かったり、理や支援が必要。

② 児童の課題の可視化



対象となる児童の課題を可視化できる。可視化することで、その子の課題が「対人関係の向かい合い」や「内面的傾向」の強みや、支援の優先順位は何かが分かったり、カードが多すぎると、困っている可能性がある。

(2) 教員同士の共通理解・支援計画のツールとして

① 教員同士の児童の共通理解



児童のよさや課題を教員間で共有する際にも有効である。見方が変われば、別なよさや課題が見えてくることもある。共通理解にも有効であると考えられる。

② 支援計画のツールとして



課題となる行動を軽減するために、どんな行動が有効か検討したりするツールとしても活用できる。

© HIRAHARA YAMAMOTO

＜教員と子どもでの活用編＞

(a) 子どもの自己理解の契機を高めるツールとして



子ども自身が「自分のよさや課題」を可視化し、自分のよさや課題を自分自身で気づくことができる。(自己発見を促すツール) また、教員と子どもが気づくことができる。子ども自身が気づくことができる。自分自身で気づくことができる。自分自身で気づくことができる。

(c) 行動力の向上



いろいろなカードを並べて子どもと一緒に、行動の修正を促していく。課題となるカードの代わりに、どんな行動が有効かカードを並べてみる。子ども自身が気づくことができる。自分自身で気づくことができる。自分自身で気づくことができる。

(b) 自分の行動の可視化



子ども自身が「自分のよさや課題」を可視化し、自分のよさや課題を自分自身で気づくことができる。(自己発見を促すツール) また、教員と子どもが気づくことができる。子ども自身が気づくことができる。自分自身で気づくことができる。自分自身で気づくことができる。

(d) 成果の可視化と強化



カードを並べてから成果の可視化ができる。もう一度は言わなくてもこのカードはいいねと褒めたり、カードを移動する。それがいいにできるようにカードを入れる。目的のカードが青から赤へ変わっていき、成果が見えやすくなる。

受賞の言葉

山内 裕美



この度はこのような賞をいただき、大変光栄に思っております。

子どもたちと過ごす中で、「生徒指導の重要性」を日々痛感し、今回の実践のテーマとしました。「結末の生徒指導」ではなく、「未来に繋がる生徒指導」がしたいと思い研究をしてきました。

何気ない日々の中で行われる生徒指導に着目し、取り組みを続けていくという小さな積み重ねが今回の教育記録につながりました。そして、子どもたちに寄り添い、時に向き合い試行錯誤する中で様々な視覚ツールが完成しました。

子どもたちからの「前の自分より今の自分が好き」「友達と上手に関われるようになった」という声は何よりも嬉しいです。子どもたちも持っている力や可能性、よさを最大限に引き出せる教師になれるよう今後も努力していきます。

終わりに、いつも温かく教え助けてくださる佐藤道拓校長先生をはじめ本校で出会った先生方や、初任時代を支えてくださった前任校の先生方、そして私を育ててくださった全ての皆様に感謝申し上げます。また、私を教師として育ててくれた今までに出会った子どもたちみんなに、そして温かいご理解ご協力で支えてくださった保護者の皆様方にも感謝申し上げます。